
ある穏やかな日

詩斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある穏やかな日

【Nコード】

N6984A

【作者名】

詩斗

【あらすじ】

テスト一週間前にもなるとさすがにみんなテスト勉強に身を入れたし、“第三の男”三村信史はつまらなく思いながら帰っていた。そんな帰り道、信史はある少女と出会う。

（前書き）

「BATTLE ROYALE」原作版のファンフィクションです。私の読後感をそのまま反映しておりますので、読者様のイメージを損なう可能性があります。

なので、原作のイメージを壊されたくない方は、読まないことをおすすめします。

数学、国語、歴史など。

将来なんの役にも立たなさそうな偉大なる大東亜帝国のお授業が
終わり。

普段なら気分転換のために即行で体育館へと走るのだが、さすが
にテスト一週間前ともなると部活は休みになる。

部活なんかに現を抜かしてないでこの期間は勉強に精を出せ、と
いうことだろうが。

残念でした。せっかく部活が休みだったのにマジメに勉強する奴
なんかいねえっつの。

というわけで俺、三村信史は一人通学路を逆行中だ。

いつもなら部活休みの放課後は女の子を連れてどこかへ遊びに行
くところ。

だけど。

さすがに、テスト勉強しないと、とかなんとかって断られた。
マジメだなあ。残念無念。

「あゝ。だる……」

一人でいると、どうしても独り言が多くなる。

人間の悲しい性って奴だな。

やはり独り言をするということはおかしいことなんだろうか。

いや、だがしかし独り言を言うことで頭の中身を整理しているわ
けで。

つまりは誰にでも経験があるってことだ。

でも誰もいないのに言葉を発している奴は傍から見ればおかしい
人。

独り言は変なんだろうか、変じゃないのか。

うーん、迷うところだな。これは。

ま、そういった馬鹿らしいことを考えながら俺は帰っていたわけだ。

偉大なる教師たちの言うとおり、少しは頭を使わないとな。

近頃、全然頭を使っていけないでちよつと思考回路が変ですが。

ちよつとどころかかなりおかしいですが。

この程度ならどうにでもなるでしょう、はい。

こうして帰っていう間にも。

腕とか。ちよつと手持ち無沙汰だ。

ここんとこ四日間もボールに触っていないなあ。

鞆の紐を頭にかけて何も手に持っていないから、余計そう感じるんだろう。

だったら鞆を手持てばいいなんて。

そんなことは考えませんよ。

考えたのは別のこと。

「よし、時間もあることだし。久々にあそこに行きますかね」

俺の言うあそこ、とは。

結構頻繁に遊びに行ってた小さな公園。

通学路からはちよつと外れるんだが。

このあたりじゃめずらしくバスケのリングがあるんだ。

学校のよりはちよつと低めだけど。

それでも十分、立派なリング。

——ガン。

すぐそこが公園の入り口って時に。

ボールがリングに跳ね返される音。

誰か先客がいるみたいだな。

誰だろうねえ。こんな時間に。つってもまだ四時前か。

本当に誰だ？

こんな小さな公園。普段なら誰もいないのに。

——ガン。

あーあ。まただよ。

声とか走る音とかはしないし、二人以上じゃないらしい。ってことは一人って事だが……。

一人でシュート練習して、連続で落とすのもある意味珍しいぞ。どれどれ。

どんな人間がやってんのかね。

無闇に好奇心旺盛な俺は、そいつの顔を拝みに行くことにした。どうせ目的地だし。

ボール借りられるかもだしな。

「あ？」

そこに在ったのは、意外といえば意外。

俺よか年下の、いいとこ小三くらいのガキだった。

そのちっさいガキは今にも泣きそうな顔をしてボールを持って突っ立っている。

あ、また投げた。

——ガッ。

跳ね返される。

ふーん。フォームがちよっと崩れてるな。

あれじゃいくら調子がよくても五本に一本ってところか。

ガキの体が微妙に震えてる。

こんなところで泣くか？　おい。

お前男だろ（ってわかんねえけどさ）。

男ならこんなことで泣くんじゃねえ。

根性見せろって。

俺のアタタカイ声援が聞こえたのか。

そのガキは少し涙目になってる顔を袖でぬぐい、またシュート練習を始めた。

「――気に入った」

どうせ暇だし。

ちようどバスケがしたかったし。

この俺が直々に指導してあげようじゃないの。

「おい、そのガキンちよ」

ビクツと一瞬大きく震え、すばやく振り返るガキ。

顔が結構綺麗め。黒髪でさらさら。

こいつ女の子っぽい？　とりあえず、小学生は守備範囲外だ。

「さっきからシュート練習してるようだけど、フォームが崩れてんぞ」

「……え？」

いきなり話しかけた俺にかなり警戒心を持っていたようだが。

話の内容がつかめずキョトンとするガキ。

年相応の顔してくれちゃって。おかわいらしいことで。

「だからな。お前がシュートするときのフォーム。崩れてんだ」
「フォーム……？」

参った。

こいつは正しいフォームも知らずにシュートしてたってわけか。
ふっ……。

ものすごく教えがいがあるって、これ。

「ちょっとボール貸してみ」
素直に差し出されたボールを手に取り、手本に一回投げてやる。

——シャリン。
俺の放ったボールはゴールの鎖を潜り抜け、また俺の手に戻ってくる。

当たり前だが、リングにも当たらなかったし。
手本としては上等かな。

ガキのほうを振り向くと、目をものすごくきらきら輝かせている顔が目に入った。

いい目をしてるねえ。

「今のが正しいシュートの姿勢。フォームってやつな。わかったら一回真似てやってみろ」

「……うん」

やってみると言った途端にそいつの顔はまた暗くなる。
どうしたってんだ。

俺がこんなに人に親切にしてやってんのに、全く。

えー、この年頃のガキには……。

——軽めの挑発が有効。
了解。

「おいガキ。何でそんなに暗くなってんのか知らねえけどな。この俺サマが教えてやってるんだ。素直にやっつけ。それとももうイヤになったのか？ 根性のないお子ちゃまですね」

見下ろしながら軽く挑発。

こうでもしなけりやこのガキは動かないだろうと見越しての言葉。
その思惑に、ガキは見事に引っかかった。

綺麗な顔を引きつらせ。

こっちを一度きつ、と睨んでからボールを投げる。

——ガシャン。

おー、惜しい惜しい。

ボールはゴールに入っていないけど、泣きながら打ってたときよりは確実に上手い。

フォームも綺麗になってる。

俺のシュートを一回見ただけでこれだけ吸収するなんて。

こいつ、やっぱやるな。

あとは――。

「もっと力を抜け」

「はえ？」

またしてもキョトンとするガキ。

さっきの顔と違うねえ。睨みもいいけどこっちのほうが断然見応えあり。

とりあえず、わかりやすく説明してあげましょう。

「シュートを打つとき、体に力が入りすぎなんだ。思いっきり投げなきゃって思ってるだろ？」

「うん。そうじゃないと届かないから」

やっぱりな。

そこんどこ、皆さん結構勘違いしてらっしゃるんですよ。

バスケ苦手って言う奴はここがポイント。

一度力を抜いて打ってみましょう！

……誰に言ってるんだ、俺。

「んー、っていうかな。力を入れすぎると逆にゴールに届かなくなるんだ。逆に体が強張るから。体の――膝とか肘とかのバネが使えなくなるんだ。了解？」

「……うん」

そこんどこ、きちんと理解ってくれば可。

体が強張ってる自覚があればなおよし。

さて。

「さっきよか、フォームは確実に綺麗になってるよ。あとは……お前右利き？」

「右利きだけど」

「よしよし。ならちよつとボール置いてシュートの真似、してみ」

ボールを足元においてシュートの真似をする。

それを注意深く見ていた俺は、ある時点で「ストップ!」っと大声を出した。

ボールを放る直前の姿勢。

傍によって姿勢を少しだけ直してやる。

「ここ。右肘をもう少し内側にしめろ。……そうそう。それで、体の力を抜いて」

あー、言葉じゃやっぱわかんないか。

じゃ、上手な力の抜き方、教えてあげましょう。

「はい、腕下ろしてー」

「?」

訳わからんって顔をしながらとりあえず腕を下ろすガキ。

正直でヨロシイ。

「で、一回深呼吸。思いっきり吸ってー」

「すううううううう」

「思いっきり吐いてー」

「はああああああああ」

「背伸びして、腕を大きく上げましょー」

「大きーく」

「その状態のまま、少し腕を前に曲げましょー」

「曲げましょー」

「そのまま手のひらを前に向けると完成」

「完成?」

「それが力を抜いた正しい姿勢、な? 覚えろよ」

「! はいっ」

元気のよい返事ですな。

いやあ、最近の若者は元気でよいよい。

って俺もまだ十分若いだろ。

あともう一息。

「体の力を抜いたその姿勢のまま、腕じゃなく膝を使ってボールを飛ばすんだ。こう……な」

横で同じ体勢になってボール放る真似をする。

それをじっと見ているガキ。

本当に、部活で誰かに教えるよかやりがいがある。

「ほれ、やってみそ」

ガキの足元にあるボールをとって渡してやる。

真剣な目でコク、と小さく頷くとゆっくりと俺の言ったことを反芻しながらボールを投げた。

——シャリンッ。

「はいったあ！」

「はい、おめでとー」

ぱちぱちぱちぱち拍手してやると、そのガキは本当にうれしそうに微笑んだ。

フォームも綺麗。ボールを放るタイミングばっちり。

よしよし。完璧じゃん。

「今のを忘れないようにもう一回だ。ふぁいとー？」

「おー！」

こんな具合で俺とガキのシュート練習は進んだ。

何回も何回もシュートを打つうちに、ガキは連続で入れるようになった。

こりゃーいいんでないの？ 飲み込みが早いし。

あのままずっと打ってたら、間違ったフォームが身についてただらうな。

「なー。お前、運がいいよ」

「そ？」

「そ。なんたってこの“第三の男”三村信史が直々に教えてやっ
たんだからな。感謝しろー」

「!!!!」

第三の男、と聞いた瞬間のこいつの顔。

なんだかなー。この反応。

俺の事知ってそうなんだが。

ってか顔赤くなってるよおい。

百面相百面相。

「お、お兄ちゃんが第三の男？」

「イエーッス。その通り——だが、俺のこと知ってんのか？」

「もちろん！ 郁美ちゃんから毎日聞いているよ！！ 女たらしで
バスケ馬鹿だけど、すっごいかっこいいって」

郁美ちゃんから聞いている。

この言葉を聞いた瞬間、俺の頭は回らなくなった。

それはつまり。

郁美の知り合いつてことで。

それはつまり。

知り合いつてことは同級生の可能性大つてことで。

それはつまり。

「お前……小五か？！」

衝撃だ。

最近のガキって普通でつかうないか？ 俺の妹の郁美ですら俺の

肩位まで身長あるしな。

こいつ、いいとこ俺の胸まで。

140ないんじゃないか。

声変わりも終わってない高い声だし。

これじゃあ、まんま女の子だ。

「おい、ガキンちよ。いくらなんでも小五でこの背は低すぎだ。」

無理でも伸ばせ」

「そんな無茶苦茶な。これでも去年から二センチも伸びたんだから。……一番前だけど」

そうだろう、そうだろう。

この背より小さい小五がいたら、それはそれで衝撃だ。ん？ でも、郁美の友達ってことは。

「実は女の子？」

「実は何も、女の子だよ」

うーん。

小学生を守備範囲外にしといてよかった。

俺、面喰いなのにこのガキは十分鑑賞に堪えるしな。

微妙に論点がずれてきているがまあそれは置いて。

「お前、でかくなったら美人になるぞ。後二年もしたら彼女にしていようか」

【彼女】の言葉に、顔を真っ赤に染めて絶句するガキ。

それからまたかわいらしい顔をゆがめて睨んで。

「……やっぱ女たらしじゃん」

そりゃないぞ。

心温まる会話の後。

時計を見たら七時近くだったんでこの子——潑ちゃんと言うらしい——を家まで送ってやることにする。

夏でまだ明るいけど、こんな小さな女の子を一人で帰させらんないでしょ。

男が廢る。

で、その帰り道。

ちよっと気になってたんで、聞いてみた。

「あのさ、なんで泣きながらシュート練習してたわけ？ 今は体育でバスケ、やってるわけじゃないだろう」

だてに妹って訳じゃない。

毎日毎日郁美から体育で何をしたか、報告を受けてるんだよ。いらんって言ってるのにね。

しかもバスケットだったら俺に指導を仰ぎますからな。

「……同じクラスにね、青樹って言う番長オトコがいるんだけどね。そいつとね、賭けをしたの」

「ほー。そりやまたどうして？」

「『お前みたいなチビにシュートが入れるわけがない。』

もしも入ったら裸逆立ちで校庭100周でも、なんでもしてやるよ』って」

あいたた。

馬鹿だなーそいつ。

そりやもうずぼり子供の論理。

“好きな子ほどういじめる” ってやつじゃん？

しかも滯チャン気付いてないって。

かわいそうな青樹クン。

思わず涙が……。

「でもさー、もうフォーム完璧だし。賭けに勝ったじゃん。よかったなー。ってことで青樹クンに何ささんの？」

「……二度と私をいじめないように」

結論。

青樹クン↓滯チャンが好き。

滯チャン↓青樹クンちよつと好きかも。

わお。

俺って恋のキューピッドじゃん。

古いけど。

「じゃー、ばっちりだ。応援してやつから、頑張れよ」
「うん」

意外と近所だった滞チャンの家まで送って。
よかったらいつでもバスケ教えてやるよー、とかって約束して。
自分も家に帰ることにした。

……郁美にバレたら怒鳴られるかもな。

一番にバスケを教えるって約束したのに、郁美より先に他の子にバスケ教えたし。

郁美が怒鳴るとかなり怖いんだよ。

でもま、いいか。

小さな恋のキューピッドになれたし。

それに。

いつもより少しだけ、穏やかになれた日だったし。

ま、いいさ。

この穏やかな気分のまま。

久しぶりに、マジメにテスト勉強でもやってみるかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6984a/>

ある穏やかな日

2010年10月14日21時32分発行